

Title	高島佐一郎著 貨幣及物価の原理
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1915
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.9, No.12 (1915. 12) ,p.1481(145)- 1487(151)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19151201-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

云ふ可く、著者が序文に於て「英米に於ける商店の實際に鑑み之を我國の現狀に照し、其利害の存する所を述べ、就いて學ぶべしと信じたる事は細大となく之を採録した」と云へる其所言は正に正札懸直なき本書の實質といふ可し。唯本書の實質斯の如くなるが故に本書は書籍に依りて商業の實際の大要を學ばんとする學生向のものに非ず、寧ろ實際に商業に従事しつゝある商家の主人並に店員の爲に最も適切なる参考書たりと云ふ可し。

斯る参考書として之を觀れば兎角舊習に忤み改良に怠惰なる本邦商人に對して英米の進歩的商人の實行せる新施設を説き注意すべき事項を詳示せる著者の勞は多しとす可きも、就中吾人の本書に最も喜ぶ所は邦人の兎角短所とせる精緻なる計數的觀念の必要を細説せる點と、我が所謂新進的實業青年に有勝なる形式的模倣の危険を説示するに勉めたるこの二點に在り。此

點に於て著者が各章各種施設に就き著者多年の經驗上より與へたる注意は惟ふに新式經營法の列舉説明よりも更に大なる可く、此點よりして本書は新智識ある學校出身の店員並に實業學校の學生に取りて頗る有要の参考書なる可し。著書は序文に於て「理屈を論せんよりも寧ろ事實を語る」と言へりと雖も此點に於て吾人は寧ろ本書を以て實業方面の眞理論を説けるものと評するに躊躇せず。

本書は勿論商人の純私經濟的見地より如何にせば最大の利益を擧げ得可きやを説けるもの、從つて其推獎する施設方法の必ずしも國民經濟上最有利のものと即斷す可らざるや論なし。即ち本書は徹頭徹尾商家私經濟上の教科書なり參考書なり。而して此點より言へば吾人は著者に向つて小規模の小賣商店經營に就て今一步進める著者の所見を明説せん事を望まざるを得ず。大商店の經營に學ぶ可き點多きは眞に著書の言

の如しと雖も、著者が販賣方法、經費賣價等に就て詳に過ぐる程の注意を加へたるより觀れば、單に大經營の經營方法を參考に供すと云へる丈にては悟惡き我大多數の商家商人には能く參考資料を咀嚼し利用し得る程の能力を期待するを得ざる可し。惟ふに我國の小賣商業は今尙ほ大部分小規模なる小賣商人の掌裡に在り。是等の徒に向つて現代式經營法の應用方法を説くこと餘りに概括的略式的なりしは吾人の大に本書に惜む唯一の點なり。(氣賀勘重)

高島佐一著『貨幣及物價の原理』

大正四年十一月 東京實文館發行
菊版三百五十五頁 定價金壹圓參拾錢

本書は本誌十月號に於て紹介せし高島氏の著述『金融の原理』の姉妹篇として上梓せられたるものなり。主文は紙數百四十四頁を算し、他の二百五十一頁は附録に充てたるものなりとす主文に載するは即ち『貨幣及物價の原理』にし

て、附録は題して『列國幣制の新傾向と歐洲戰爭』とせり。

『貨幣及物價の原理』は其姉妹篇なる『金融の原理』がバーカー氏 (D. A. Barker) の著述 Cash and Credit の補譯なると同じく、巴氏著書の姉妹篇 The Theory of Money を譯述し、隨所に他の學者の唱ふる學說を挿みて比較研究の便に供したるものなり。バーカー氏の The Theory of Money は大體に於てケメラー並にフイシヤー兩氏の解説せる所謂新貨幣數量説をば輕快なる敘述法に依りて通俗的に祖述せるものなりと云ふを得可し。されば、巴氏の著書は科學的説明の點に於てはケメラー並にフイシヤー兩教授の著述に及ばざる所あるも、新貨幣數量説を簡略明快に説述せる點に於ては他の兩書に對して一日の長あるものなりと云はざる可からず。

高島氏は此バーカー氏の原著を譯述するに當りて『金融の原理』に於て採用せしとは異なる

方針に依りしが如し。高島氏は此『金融の原理』に於てバーカー氏の Cash and Credit の全文を譯載せるのみならず、原著の章節をも襲用せられしが、本書即ち『貨幣及物價の原理』に於ては、氏の原著 The Theory of Money の全文を譯出せざるのみならず、章節の順序をも變改せられたり。『貨幣及物價の原理』の要目は左の如し。

- 第一章 貨幣の職分殊に延期支拂の標準
- 第二章 交換力程式の代數學的説明
- 第三章 交換力程式の水壓機理的説明
- 第四章 貨幣及び當座預金の循環速度
- 第五章 數量説か、生産費説か
- 第六章 物價變動の測定法
- 第七章 貨幣價值を鞏固確實ならしむる方策と其の批評

右の中第一章は原著に倚らずして、高島氏が自家獨創の考案に基づきて執筆せられたるものなるが、他は原著の大部分を譯出し、隨所にフイシャー、ラフリン、キンレー、ケメラ、リ

頗る適確にして、譯文亦流暢些の澁滯を示さざるが如し。

高島氏自身の獨創たる第一章も、第二章以下に於て氏が挿入せる註釋も共に其論述には氏自身の言を以て意見を吐露する方法を採らず、主として前記諸大家の學說を系統的に引用して以て氏自身の信奉せる學說を講述せんとするに在るが如し。而して引照せられたる學說に依りて考察するに、高島氏は『新貨幣數量説』を以て全然正確なるものと看做し、殊にケメラ、フイシャー、バーホマー、バーカー氏等の考案に成る此學說の代數的解説法に賛成せるものゝ如し。然りと雖も、高島氏はフイシャー教授の貨幣購買力調節案が假令理論上完全なりとするも、實際の政策としては之に對して賛同の意を表することを得ずと論じ、物價平準の變動を緩和する爲めには紙幣發行額を調節するを以て得策なりと説きて主文を結べり。

カード、デヴオンズ、バーボア、ニコルソン、メンガー等諸家の學說を引用せるものなり。第一章に於ては高島氏は劈頭貨幣の理論の研究の至難なるを説き、進んで貨幣の職分として貨幣學者の擧ぐるを常とせる『交換の媒介』『價値の標準』並に『延期支拂の標準』の三者中第三は第二の觀念を延長したるものに外ならざるを以て貨幣の根本的職分と看做す可きは『交換の媒介』並に『價値の標準』の二者に過ぎずと論じたる後、一定不動の價値標準を求め難きことを説き、最後にフイシャー氏の提案せる貨幣購買力の調節案に論及し、二三の批評を加へて章を結べり。

次に第二章以下第七章迄は前述の如くバーカー氏の著述を精密に譯載し、處々に高島氏自身の註解を挿みたるものなるが、評者が試みに原文と對照したる譯文の數節を根據として全般の出來榮を推定することを妨げずとせば、譯述は

附録は『列國幣制の新傾向と歐洲戰爭』と題しキーンズ氏著『印度通貨と金融』(J. M. Keynes, Indian Currency and Finance) の一部『イコノミックス・ジャーナル』誌千九百十四年六月號に載せたるニコルソン氏の印度金融通貨調査委員會報告書に對する批評文、『ジャーナル・オブ・ポリチカル・イコノミー』誌千九百十四年十月號所載コナント氏の『通貨政策と歐洲大戰』並に『クオーターリー・ジャーナル・オブ・イコノミックス』誌千九百十五年八月號ベンヂックス氏の『獨逸の金融的動員』の四篇を譯載し、主文に於けると同じく高島氏自身の註解を加へたり。

要するに、本は其の全篇を通じて獨斷的の推理斷定を下すことを避け、歐米諸大家の學說を組織的に點綴整述して高島氏の信奉せる新貨幣數量説を系統的に解説せるものにして、著者が幾多の名著を涉獵し、貨幣の購買力に關聯せる諸種の問題に就きて著名の學者の說を網羅す

るに努めたる跡歴然たり。著者は亦學說を引用するに當りて、一二の例外を除くの外は各其典據を明かにし、加ふるに卷頭には邦文並に歐文の參考書を挙げ、讀者に本書を出發點として更に研究を進める便宜を提供せり。吾人は單純なる譯書を除きては、本書を以て貨幣數量說の解説を主題とせる唯一の邦書として、又貨幣と物價との關係を研究する者に取りては座右に置くべき有數の參考書として、數量說の賛成者に對しても又其の反對者に對しても推舉するに躊躇せざる者にして、同時に著者が『金融の原理』を發表して日尙は淺きに今又此有益なる著述を上梓せられたることは其の精力の如何に絶倫なるかを示すものにして、我學界に貢獻せらるゝ所少からざるを信するものなり。

吾人の本書に就きて云はんと欲したる所は既に之を以て盡せり。唯著者の研究心の旺盛なる又其の學者的態度の甚だ眞摯なる余輩の呈する

『予が試みる分析的・研究は、小切手取引高に對する現金取引高の比率を維持するの習慣力は、預金通貨に對する現金の比率を維持するの最有力要素たると同時に、銀行家の準備金に關する考量とは全然一獨立するものたるを示すものなしとせざるなり。』

此一節は本文中に在りて、括弧に依りて區別せられざるものなるが、其の初めに云ふ『予』とは高島氏自身なるや將た又パーカー氏なるや不明なり。本文中に在る所を以て觀れば、高島氏自身なりと速斷する讀者もある可し。されど茲に述べたる『研究』が高島氏自身の研究に非ずして、パーカー氏の研究なるはパーカー氏の著書を見れば明かなり。然らば『予』とはパーカー氏を意味するが。若し果して然りとせば、全書悉くパーカー氏原著の譯述と看做すの必要ある可きも、それは事實に非ざるを奈何せん。又五十五頁に左の一句あり。

『予は全く別途の機械的模型を案じて』云々

此一句も本文中に在るを以て、『予』とは高島

criticis bonum を以て満足せず、特に吾人に對して其の著述の瑾瑕に就き愚見を述ぶることを嚴命せられたるが故に、以下二三の妄評を試みんとす。

本書は前述の如く引照該博にして、著者の博覽を證するものなるが、引用文並に註解の數甚だ多くして、且つ長く、而かも之を總て本文中に書入れたるを以て、往々思想の連續が是れが爲めに破らるゝの觀なき能はざるの憾あるが如し。或は普通の習慣に依りて本文と註釋を分離するを以て得策なりとせむか。

次に本書の中堅はパーカー氏著書の譯述なるが、是れと註解との分界稍明瞭を缺けるが如し註解は括弧を以て譯文と區別せられたるも、用語の關係上パーカー氏の意見と高島氏の意見とが錯綜して、孰れが前者にして孰れが後者なるかを區別するに困難を感じるの節なきにしも非ず。例へば、四十六頁に左の一節あり。

氏自身を意味するが如く見ゆるも、此處に云ふ機械的模型はパーカー氏の案出せるものなりとす。更に、第五章『數量說か生産費說か』の本文に於て八十八頁に左の一句あり。

『此處に吾人は』云々

茲に云ふ『吾人』はパーカー氏原著同じく八十八頁第一行に在るものを譯せるものなるは明かなり。然るに高島氏著書の同章末尾に載せたる註中に左の一節あり。(九十七頁)

『……吾人の切望する所なりとす』

原書には是れに相當せる句なきを以て、茲に云ふ『吾人』は高島氏自身のことなり。されど、前者を以てパーカー氏の editorial we なりとすれば、後者をも亦然りとせざるを得ず。又之に反して後者を高島氏の editorial we なりとせば前者をも然りとせざるを得ず。而かも孰れにしても事實に反するのみならず、此事實を知るが爲めにはパーカー氏の著述と高島氏の著述とを

一々對照せざるを得ず。最後に、高島氏著書三百五十三頁にも同一の困難あり。

本書記述の體裁は前述の如く歐米學者の學說を引用して著者自説の正しきを證明するよりは寧ろ主として之を以て自説に代らしむるの方法を採りたるが爲め、各引用説に對して著者が如何なる程度迄責任を負はざるかは明瞭ならず。従つて本書に載せたる學說に對して吾人が妄評を試みるは見當違の結果を生ずるの虞なしとせず。されど、隨所に明白に著者自身の説と看做し得可きものなきにしも非ず。此等の諸説の大部分は評者の卑説と略一致せるものなるを擇ぶ、唯評者が疑問を懷ける一例を擧ぐれば、第七章『貨幣價值を鞏固確實ならしむるの方策と其批評』中著者は百四十一頁に於て『現幣制を革め而して克く價值を鞏固ならしむの策としては遂に物價運動を斟酌して通貨を調節するの外なきを確信するものなり』と論ぜられたるが、通

に日本が採用す可きものなりと唱へたることなしと思惟す。されば、評者は前の意味に於てはフ氏案に『左祖』せるものなるも、後の意味に於ては『左祖』せしに非ず。學理上完全なる米價調節案を作成することは、一部我經濟學者の反對説あるにも拘らず、不可能に非ずと信ず。されど、之を實行すへきか否やは自ら別問題なりとす。

以上本書に關する一二の愚見を述べたるが、是等は決して其の眞價を傷くるものに非ず。されば、吾人は本書が其の姉妹篇と共に廣く世に行はれんことを祈りて已まざるものなり(S.T)

宇野利右衛門著『職工優遇論』

大正四年十月工業教育會(大阪)發行
菊版三百八十九頁正價貳圓五拾錢

著者宇野氏は紡績會社其他の大工場に勞働せる男女職工の教育の普及を圖るを目的とし職工問題に關する種々の著述並に雜誌の出版を其の

貨即ち銀行券(同頁第四行參照)を如何にして調節す可きかの方法に就きては著者自身の詳細なる説明を缺けるが如し。他の種類の交換要具の數量にして變化なしとせば、銀行券の收縮が物價平準に影響を與ふ可きは明かなりと雖も、現幣制を維持し金の自由鑄造を許すにも拘らず銀行券の收縮のみに依りて貨幣全流通額並に信用を同程度に收縮し以て物價を調節し得るものなりとは必ずしも即斷すること能はざるが如し此問題は銀行券調節の方法如何に依りて或は解決することを得可きに、其方法の説明なきは吾人の遺憾とせざるを得ざる所なりとす。序に吾人は此物價調節論に關して斷はり置き度きは、著者は評者(高城)がフイシャー氏の貨幣購買力調節案を『左祖』せしと述べられたるも、評者は唯此考案が學理上正確にして一定の状態の下に於ては有效的に實施し得るものなることを論じたるのみて、如何なる事情ありとも、各國殊

主なる事業とせる大阪市の工業教育會の主事にして、我國に於ける紡績織物工場の男工女工の生活状態に最も精通せる一人なり。氏は幼にして父を失ひ自活の爲め種々の勞役に服したりしが常に餘暇を利用して修學を怠らざりき。十數年前偶々人に知られて文筆の士となり、爾來職工問題を實地的に研究して、著書に雜誌に其の成果を發表せしが、今回畢生の事業として職工の優遇方法を研究し、其の結果を二十四冊より成る一大著述として發表することを企圖し、既に第一冊を上梓せり。目下の計畫は總論三篇、各論十八篇、結論一篇並に附録二篇を著はすに在りて、毎年二冊宛發行し、十二ヶ年にて完結するものなりと云ふ。完成の曉には本書は一特種問題に關して一著者が單獨に執筆せる書物として内外に殆んど其比類を見ざる大篇雄作たる可くして、我學界文壇の一奇觀たるを失はざる可し。